

Gunnarsson, Lena, 2017, "Why We Keep Separating the 'Inseparable': Dialecticizing Intersectionality," *European Journal of Women's Studies*, 24(2): 114-127.

レナ・グナーソン, 2017, 「なぜ私たちは「切り離せない」ものを切り離し続けるのか——インターセクショナリティの弁証法」

※ ( ) の数字はページ数を表す。

### レジュメ作成者による紹介文

本稿の著者である Lena Gunnarsson (スウェーデン・エレブルー大学講師) は、フェミニスト理論の専門家であり、近年はフェミニスト批判的実在論に関する論考を多数執筆している。本稿は、2017年に *European Journal of Women's Studies* に掲載されたのち、フェミニスト批判的実在論の体系的成果である Van Ingen et al. eds., 2020, *Critical Realism, Feminism, and Gender: A Reader*, New York: Routledge. に再掲されている。本稿は、交差性カテゴリーの分離可能性／不可分性をめぐる議論における、二者択一的な思考法を問題視し、弁証法的批判的実在論に依拠しながら交差性を捉えることを提案する。

## 0. 前提知識—インターセクショナリティ (=交差性)・アプローチとは何か

- ブラック・フェミニズムに起源をもつインターセクショナリティ・アプローチは、複数の社会的カテゴリーの交差 intersection によって生じる権力関係が、個々人の社会的立場や日常的経験にどのような影響を及ぼすのかを検討する。とりわけ人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国籍、障害の有無、エスニシティ、年齢などの数々のカテゴリーを、相互に関係し、形成しあうものとしてとらえる点に特徴がある (Collins and Bilge 2020=2021: 16)。
- その学術的起源としては、Kimberly Crenshaw (1989) の論文「Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine (＝周縁をマッピングする——インターセクショナリティ、アイデンティティ・ポリテイクス、ウィメン・オブ・カラーにたいする暴力)」が挙げられる。
  - Crenshaw は、ジェンダーと人種が別々のカテゴリーとして扱われる結果、黒人女性がフェミニストと反人種主義者の両方の理論と政治において周縁化されてしまうという傾向に注意を促し、ジェンダーと人種の両方を考慮に入れ、それらの相互作用がいかんして黒人女性の経験を形成するのかに着目する必要があると主張した。

## 1. 導入 (114-115)

- 何か他の何かと交差していると言うとき、私たちは一体何を意味しているのだろうか。

- 交差の性質に関する論争は、しばしばカテゴリーの分離可能性と不可分性との間の緊張を軸に展開される。
- 「交差性 intersectionality」という言葉を提起した Kimberlé Crenshaw (1991) が、ジェンダーは人種と交差するものとして分析されなければならない、そうすればジェンダーのアイデンティティは本質的に人種的なものとして理解される、と主張したとき、まさに「交差性」という言葉は、交差する実体は何らかの形で互いに異なることを意味する。
- 交差性を扱う研究者の大部分は、ジェンダー、人種、階級といったカテゴリーを、分離可能かつ不可分なものとして扱っている。
  - しかし、カテゴリーの分離可能性 vs. 不可分性という問題が明示的に取り上げられる場合、交差性カテゴリーの不可分性を強調する立場とそれらを分離する必要性を維持する立場に二極化する。
- 本稿は、交差性カテゴリーの分離可能性／不可分性をめぐる議論における、二者択一的な思考法を問題視する。そのさい、Roy Bhaskar の弁証法的批判的实在論哲学を引き、交差カテゴリーを分離的[separate]かつ統一的[unified]なものとして考えることができると主張する。
  - まず、現実の差異[differentiations]と相互接続[interconnections]に関する Bhaskar の概念化を紹介する。差異における統一という図式を中心とした Bhaskar の弁証法は、分離性[separateness]と統一性[unity]という非生産的な二元論にいかに対抗できるかを示している。(=第2節)
  - 続いて、広義の交差性論者がどのように「分離可能性／不可分性」のテーマを扱っているのか、いくつかの例を検証し、分離可能性と不可能性のどちらかを強調する説明に異議を唱え、分離可能性／不可分性のジレンマについて筆者自身の見解を展開する。(=第3節～第6節)

## 2. 弁証法的批判的实在論 (115-117)

- 弁証法的批判的实在論は、イギリスの哲学者 Roy Bhaskar (2008 [1993]) によって、批判的实在論の一部として展開された。实在論的弁証法が他の弁証法的哲学と異なるのは、以下の立場を鮮明に打ち出している点にある。
  - すなわち、实在論的弁証法は、現実が弁証法的に構造化されており、差異における統一化 unity-in-difference の様式を経由して、物事が互いに共通点／相違点を持つと考える。
  - このアプローチは、現実を、階層化され、分化した全体として捉え、その要素が本質的につながりながらも互いに比較的自律しているとみなす。

- 弁証法的批判的实在論者の見解では、存在 being とは相互に連結されたオープンエンドの全体である。
  - 存在における異なる諸部分と諸次元は、分化 differentiation、階層化 stratification、出現 emergence の過程によって、本質的に連結されていると同時に、互いに比較的自律的である。
  - 現実には存在に対する構造を有しているが、現実にはプロセス的なもの becoming でもあり、存在の構造性も流動性も絶対的なものではなく、互いの関係性の中で意味を持つようになる。
  - Bhasker の弁証法的全体性 totalities の図式は、何かは他の何かの一部であると同時にそれとは別であることが可能であるということを説明している。
  - このような二元性を支えているのは、差異における統一という概念であり、この概念は分離性と不可分性の二元論に挑戦する。

### 3. 「不可分性 inseparability」の不確実な意味 (117-119)

- フェミニスト・ポストモダニズムの代表論者である Judith Butler も<sup>1</sup>、交差性の問題を扱っている。Butler は *Gender Trouble* (1990) のなかで次のように述べている。

もしもひとが女で「ある」としても、それがそのひとのすべてでないことは確かである。…ジェンダーは、人種、階級、民族、性、地域にまつわる言説によって構築されているアイデンティティの様態と、複雑に絡み合っているからである。その結果、ジェンダーをつねに生みだし保持している政治的および文化的な交錯から、「ジェンダー」だけを分離することは不可能なのである(1990=1999: 22) <sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> Butler 以前において、ジェンダーという概念は、歴史的・文化的・社会的に構成された性差のあり方を指す言葉としてとらえられていた。当時のフェミニストたちは、このようなジェンダー概念に依拠しながら、生物学的な性差 (=セックス) とは異なる、文化的な可塑性をもつ社会的な性差 (=ジェンダー) を問題化することを目指した (北田 2006: 31)。しかし、社会的な性差であるジェンダーを、生物学的な性差であるセックスと切り分けて議論することは、セックスに関する問題を最初から棚上げすることを意味する (坂本 2000: 92)。すなわち、セックスを、ジェンダーが書き込まれていく基盤としてとらえる限り、いつまでたってもセックスは説明されない残余として残されてしまう (千田 2001: 32)。この点を問題化したのが Butler であり、所与のものとして規定されているように見えるセックスすらも、二分法的に男女の記号を付されながら構築されていると主張した。Butler の流れを汲むポストモダン・フェミニストたちは、性別に関連する概念や事象が、いかに可変的で、不安定なものであるかを探究し、本質主義に基づく女性差別に対抗した。

<sup>2</sup> If one 'is' a woman, that is surely not all one is ... gender intersects with racial, class, ethnic, sexual, and regional modalities of discursively constituted identities. As a result, *it becomes impossible to separate out 'gender'* from the political and cultural intersections in which it is invariably produced and maintained.

- ◇ Butler は、ジェンダーを他の様式から分離することはできないと言いつつも、まさにこの発言の中でそれらを分離しているという点でパフォーマンスな矛盾に取り組んでいる。もしジェンダーが、彼女が列挙する他の関係（人種、階級、民族など）から分離可能でないのだとしたら、Butler がそれらを異なる名前と呼ぶ必要はないだろう。
  - ◇ Butler の発言の曖昧さは、2つのものが互いに分離している、あるいは区別されていると言うとき、何を意味するのかという問題を提起する。
- 批判的実在論は、何かがある他の何かから分離して存在するという状態について、「因果的基準」を適用して説明しようとする。
    - ・ もし何かがある他の実体の因果的影響に還元されない形で世界に影響を及ぼしているならば、それは別個の現実として語る事ができる。
  - 実在論的かつ唯物論的な交差性アプローチを代表する Nira Yuval-Davis (2006) は、交差する関係のレベルを明確に分けることによって、分離可能性／不可分性のジレンマを回避できると考える。
    - ・ 彼女は、具体的な主体や経験において交差的カテゴリーを分離することはできないと主張しながらも、「それぞれの社会的区分が異なる存在論的基礎を持っており、それは他の社会的区分とは還元できない」(2006, p.195) とし、深い構造的レベルにおいてカテゴリーを分離して捉えるべきだと論じる。
    - ・ 彼女は、階級を「生産と消費の経済的プロセス」に、ジェンダーを「性的／生物学的差異によって社会的役割を規定される主体のグループに関する言説の様式」に、セクシュアリティを「身体の構築、性的快楽、性交に関する言説」に、民族や人種の区分を「排他的／包摂的境界を中心に構成された集団の言説」に関連づける(2006, p.201)。
      - ◇ 私の分離可能性／不可分性の緊張の扱いは、Yuval-Davis とは異なる。まず始めに、私は「これらの区分のそれぞれの存在論的基礎は自律的である」という彼女の主張を複雑にしたい。たとえ最も深い抽象的なレベルで分析したとしても、経済的、ジェンダー、性的、人種的關係を互いに絶対に独立したものとして考えることができるかどうかは疑わしいと強調する。

#### 4. イントラ・アクション intra-action と「プロセスフィケーション processification」(119-121)

- 交差するカテゴリーの相互浸透を肯定するために、一部の理論家は、「相互作用」ではなく「イントラ・アクション intra-action」という用語を使うことを好む。

- フェミニスト理論の分野では、Karen Barad によって「イントラ・アクション」という用語が紹介された。彼女は「相互作用に先行する個別のエージェンシーが存在すると仮定する通常の『相互作用』とは対照的に、イントラアクションの概念は、個別のエージェンシーが先行するのではなく、むしろその相互作用を通じて出現すると認識する」(2007, p.33) と述べる。
- Nina Lykke は、Barad によるイントラ・アクションの概念は、多くの交差性研究者に共有されている「カテゴリー間の交差的な相互作用は、ジェンダー、階級、エスニシティ、人種、セクシュアリティなどの単なる追加としてではなく、相互に絡み合った変容のプロセスとして分析されるべきであるという合意」とよくフィットすると判断する (2010, p.51)。
- 興味深いことに、Bhaskar (2008 [1993]) もまた、「イントラ・アクション」という用語を彼の弁証法的な研究で用いている。さらに、Barad と Bhaskar の間には、ともに実在論的世界観を採用しているという興味深い親和性がある。
  - しかし、本稿の核である「二者択一 either/or」思考 vs. 「両方 both/and」思考に関連しては、決定的な違いがある。(二者択一=Barad、両方=Bhaskar)
  - イントラ・アクションに関する Barad の定式を詳しく見てみると、イントラ・アクションの産物と行為主体の間に潜む時間的二元論が浮かび上がってくる。Barad にとって、「異なる行為主体性 agency が先行するのではなく、むしろその相互作用を通じて現れる」(2007, p.33)。
  - Bhasker のパースペクティブからすれば、物事はイントラ・アクションの産物であると**同時に**、新たな相互作用やイントラ・アクションに先行し、その出発点となりうる。たとえ何かがイントラ・アクティブな過程の産物であったとしても、それは産物—あるいは「もの」—としての比較的安定した存在を有し、その観点から、現実の他の次元と相互作用／イントラ・アクトする。
- 交差性概念の登場以前にも、フェミニズム理論において、イントラ・アクションを考慮に入れた分析はなされていた (Lykke 2010)。
  - 例えば、マルクス主義フェミニストたちは、資本主義と家父長制の間の正確な関係について探究し、それらが互いにどのように共構成 co-constitute しているのか、あるいは対立しているのかを分析した (Hartmann 1979)。
    - ◇ 一方では、資本主義は、例えば、女性の男性に対する従属に基づくジェンダーを基盤とする分業を前提とする点で、家父長制と根本的に絡み合っている。また、資本主義は、それが依存する生殖実践を必然的に過小評価し、それ自体では生殖の担い手を保護し支援するために必要な手段を提供できないという点で、本質的に家父長制的かつ女性蔑視的である。他方で、歴史的に見れば、資

本主義の個人中心主義は、女性運動の出現の基盤であり、その意味で、男性優位への挑戦であった。また、資本主義が労働者の供給の増加を必要としたことは、女性の労働市場への参入を可能にしたという意味で、男性優位の構造に挑戦するものであった。

- ◇ この種の交差的な問いかけはすべて、差異における統一性が異なる形で構成されうるといふ弁証法的テーマがもたらす導きによって、有益な情報を得ることができるということを説明する。

## 5. 構造と主体 (121-122)

- 前述のように、Yuval-Davis は、交差性の理論化においてしばしば混同される存在論的レベルを区別する必要性を強調している (cf. Dy et al. 2014)。
  - Yuval-Davis の説明の強みは、現実のさまざまな側面を分析的に分離することだけを主張するのではなく、この分離の必要性が存在論的区別に起因することを強調している点である。
- しかし、分離可能性に関する Yuval-Davis の主張には明確さに欠けるところがあるため、カテゴリーの不可分性を強調する論者による批判を呼び起こしている。
  - Sumi Cho, Kimberlé Crenshaw and Leslie McCall (2013)は、構造的不平等に焦点を当てるために、アイデンティティと主観への偏執から距離を置く交差性研究が急増していると見ていることを問題視している。彼らは、この種の議論が前提とする構造的権力とアイデンティティの間の分裂を懸念しており、「アイデンティティと権力の間での対立は、それ自体、社会階層を理解するための硬直的で静的 nondynamic な方法である」(2013, p.797) と主張する。彼らは Yuval-Davis の著作に言及してはいないものの、批判の対象が彼女であることは明白である。
  - 分離性を強調する Yuval-Davis も、分離不可能性を主張する Cho からも、どちらも正しいと著者は考える。

## 6. 抽象化と、「分離主義」理論の継続的な必要性 (122-125)

- カテゴリーとそれを支える社会的プロセスとの関係をどのように考えればよいのだろうか。Floya Anthias (2008) は、この関係性に内包される緊張関係を回避することはできないとし、交差という概念の有する危険性の一つとして、人々を固定的かつ永続的な集団に属するものとして構成することを指摘する。
  - 交差性研究において、あるカテゴリーを具体的な現実から抽象化し、他のカテゴリーを脇に置くことは、Anthias が言うように、「階級は常にジェンダー化され、人種化され、ジェンダーは常に階級化され、人種化される」(2008, p.13) という現実の複雑性に違反することになる。

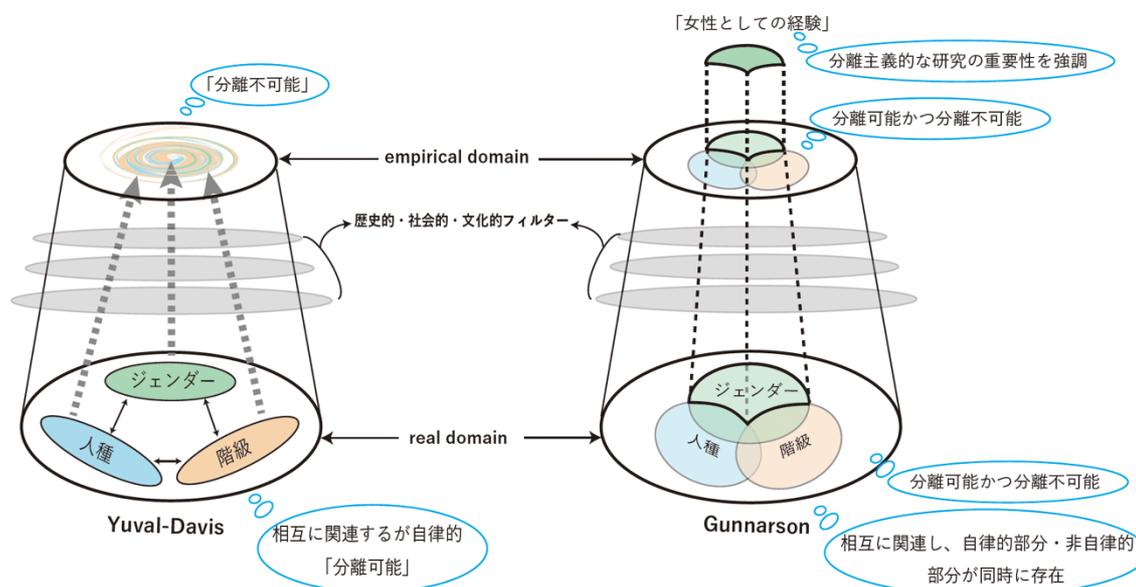
- しかし、交差するカテゴリーが、**相対的に**存在論的自律性を有することと、私たちの認識論的展望が常に部分的であることを理解すれば、この結論に至る必要はない。例えば、我々のジェンダーの分析が、無限に複雑な社会全体からのプロセス的な部分の抽出に依存していることを明確にする限りにおいて (Jónasdóttir 1994)、ある地史的位置において、この「ジェンダー」(あるいは「人種」「階級」「性」)が正確に何であるかのかを問う「分離主義的な」理論的探究は必要である。
  - ジェンダー、人種、階級、セクシュアリティそれぞれの理論家は、これらの関係それぞれの力学を特定することに焦点を当てるべきである。このような取り組みは、交差性論者がそれらの相互作用の分析を進めるための基盤を作ることになる。
- 本稿は Yuval-Davis を、分析的区別の必要性を強調する交差論者の代表的な例として取り上げたが、彼女は、抑圧の具体的な経験に関しては反分離主義のスタンスをとっている。
    - 彼女は、黒人女性が黒人として、女性として、労働者階級の一員として、「三重の抑圧」に苦しんでいるという古典的な定式を否定し、「抑圧の具体的経験において、例えば『黒人として』抑圧されることは、常に他の社会的区分の中に構成され、織り込まれている」という事実<sup>1</sup>に依拠している。
    - 具体的な経験は複雑に形成されたものであり、きちんとしたカテゴリーに分けることは難しいという点には同意するが、誰かが抑圧されていることを黒人、女性、労働者階級として具体的に語ることは、必ずしも「『黒人性』『女性性』『労働者階級性』を本質化する試み」(Yuval-Davis 2006: 195) であるわけではない。
    - 私たちは、「女性であること womenhood」を、社会的に生み出されたジェンダー構造における女性の位置づけを通じて生み出される、女性の状況の次元を指し示す抽象的概念として考えることができる。換言すると、「女性であること womenhood」は、他の社会的位置と相互に作用しながらも、それ自身は還元できない特性を持つ位置として理解される (cf. Alcoff 2006)。
    - 具体的なアイデンティティや経験は、Yuval-Davis が挙げた存在論的基盤のそれぞれと本質的に相互関連する点を持っているからこそ、これらの異なる存在論的基盤が具体的状況においていかに明示されるかを区別することが意味を持つ場合がある。

## 7. 結論 (125)

- 本稿は、Bhaskar の弁証法的批判的实在論を援用し、カテゴリーが分離可能か分離不可能かを強調する交差性研究の傾向に挑戦した。

弁証法的な批判的实在論者の視点の強みは、原子論的な分離と、分化や階層化を犠牲にして連結と分離不能を過度に強調する混同主義の説明の両方に挑戦するための分析ツールを提供することである。

【参考】 Yuval-Davis と Gunnarson の主張の相違点 (以下の図は、レジユメ作成者が作成)



【参考文献】 (Gunnarson (2017) に未記載の文献を挙げる。)

Collins, Patricia Hill and Sirma Bilge, 2016, *Intersectionality (Key Concepts)*, Cambridge: Polity Press. (下地ローレンス吉孝監訳/小原理乃訳, 2021, 『インターセクショナルリティ』人文書院。)

Crenshaw, Kimberle, 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," *University of Chicago Legal Forum*, 140: 139-167.

北田暁大, 2006, 「ジェンダーと構築主義——何の構築主義か」江原由美子・山崎敬一編, 2006, 『ジェンダーと社会理論』有斐閣, 25-36.

坂本佳鶴恵, 2000, 「ポストモダン・フェミニズムの戦略とその可能性」『理論と方法』数理社会学会, 15(1): 89-100.

千田有紀, 2001, 「構築主義の系譜学」上野千鶴子編『構築主義とは何か』勁草書房, 1-41.

Van Ingen, Michiel, Steph Grohmann, and Lena Gunnarsson eds., 2020, *Critical Realism, Feminism, and Gender: A Reader*, New York: Routledge.